

# 「治国の道・自治の道」

## ① アジテーション

「人に恭しくして礼あらば、四海の内みな兄弟なり」私は、中国史というものに、強く惹かれていました。中国の辺境と呼ばれた地域、そこでは、漢民族と他民族の文化が入り乱れていました。匈奴、モンゴル、女真族。時代は変われど入り乱れた文化は、時に手を結び、時に衝突し、しかし互いを保ちながら共存し続けていた。私には、そのいずれの文化も強く輝いて見えました。漢民族の文化も、あるいは匈奴、あるいはモンゴル、あるいは女真族たち。いくつもの他民族の文化が、互いに誇りを持ち、互いの存在を認め合っていた。その時、漢民族の文化も、そして他民族の文化も、確かに息づいていた。それぞれに全力の力を振り絞って、自らの存在した証を示そうとした。私はその力強い輝きに、強く惹かれたのです。

## ② 理念

では文化とは、一体何なのでしょう。文化とは、我々の伝統そのものです。伝統とは、長い時をかけて築かれ、我々の中に生き続けるものです。つまり、私たちが生まれ、死にゆく時まで、私たちが育む礎なのです。それがあってこそ、我々はアイデンティティという、自身の存在への確信を抱くことができるのです。すなわち、文化とは民族そのものであり、文化が消えることは、その伝統や、アイデンティティが消えることでもあります。それは、我々が我々でなくなるということなのです。

しかし、今、我々の世界には、文化を守ることができず、アイデンティティの危機に晒されている人々がいるのです。その人々というのは、マイノリティーと呼ばれる人々です。マイノリティーとは、小さく、弱く、吹けば飛ぶような存在です。それに対して、マジョリティーは、大きく、強く、力のある存在です。その身をゆらせば大風を起こし、マイノリティーを吹き飛ばす。そんな力を持った存在なのです。そしてその、マイノリティーとマジョリティーのあまりに大きな力の差に、今にも吹き飛ばされそうになっている。

それは、中国の少数民族です。現在中国政府は、彼ら少数民族の文化を保護するとして、政策を行っています。しかし、実際には文化の同化を招いており、少数民族の文化が篡奪される結果となっているのです。そして、かつて確かに持っていた輝きを失っています。彼ら少数民族は、中国政府という圧倒的な存在に対し、抗うことができていません。そして中国政府は、それを黙視しているのです。

では中国はどのように少数民族に接するべきだったのでしょうか。少数民族の文化を、漢民族の文化に同化させない。どちらの文化も同じように価値のあるものとして認め、許容すべきだったのではないのでしょうか。少数民族の文化も、漢民族の文化も、それぞれ違うものとして、しかしそれぞれに同じ価値のあるものとして、許容する。言うなれば、「みんな違ってそれでいい」んだと。そういう態度で、接するべきだったのではないのでしょうか。

そしてその上で、何者も自信の存在への確信を奪われないように、中国は、力あるマジョリティーとして、マイノリティーである少数民族を、守るべきだったのではないのでしょうか。

### ③ 現状分析

それでは、中国の少数民族を取り巻く現状を見てみましょう。現在、中国政府は、少数民族の言語教育政策であったり、少数民族の文化を守るための観光地化政策であったりなど、少数民族を支援するための政策を数多く行っています。しかし、実際にはこれらの政策は、少数民族の文化を保護できてはいません。

中国政府の保護政策は、自治地域の経済を活性化させることを最優先としたものです。そのため、自治地域外の漢民族企業を優遇して現地に工場を建てさせるなどしています。ところが、それによって自治地域内に漢民族労働者が増加し、漢民族がマジョリティーとなってしまうのです。また、少数民族としても生活のため、自治地域を離れて出稼ぎに行くなど、従来生活を捨てざるを得ない状況に追い込まれています。結果として、経済最優先の政策は、自治地域の経済を漢民族に依存させ、漢民族との同化政策と同じになってしまっています。マイノリティーたる少数民族の文化は、マジョリティーである漢民族の文化に飲み込まれてしまっているのです。

実際に、内モンゴル自治区では、中国語の母国語化が急速に進行し、ここ 20 年ほどでモンゴル語の話者は 4 割減少しました。また、チベット高原で生活していたチベット族の遊牧民は、生活がたちゆかず、2003 年以降で 8 割も減少しました。このように、少数民族の言語や生活習慣などの文化は消滅しつつあります。これでは、少数民族の文化が守られているということではできません。中国政府による少数民族の保護政策は、逆に同化を推し進める結果となってしまっているのです。

### ④ 原因分析

では、少数民族の伝統を守るためには何が必要なのでしょう。

最も大切なのは、少数民族自身が日常生活の中で文化を営んでいるということです。少数民族が、その文化を、観光のためのパフォーマンスとして演じるのではありません。観光のために作られた文化などというものは、生活から完全に離れてしまっています。その文化には、もう生きた血は通っていない。観光資源として保存された、標本にすぎないのです。これでは、文化はもう元あった姿とは違うものにねじ曲げられてしまっています。ですから、文化が本来の姿であるためには、少数民族自身が日常生活の中で文化を営んでいるということが、何よりも大切なことなのです。

こうした文化の営みには、経済的自立が必要です。現在の自治地域は、漢民族の企業無くして経済が成り立ちません。そのため、漢民族が自治地域に流入しています。その一方で少数民族は生活のために自治地域から流出してしまっています。この双方を阻止するためには、経済的な自立がなくてはならないのです。

最後に、文化的魅力の発信も必要です。少数民族の自治地域は、観光地としての知名度が低く、その魅力が広く知られてはいません。そのため、集客に限界があり、収益が伸びていないのです。ですから、文化的魅力を発信し、集客力を高めねばならないのです。

観光地として魅力を発信しつつも、少数民族が日常生活の中で文化を営む必要がある。もしかしたら、矛盾していると思われるかもしれませんが、しかしそうではないのです。観光のためのパフォーマンスではなく、実際に生活の中で生きている文化を見てもらうことにこそ、真の意味があるのです。

## ⑤ 政策

これらを満たすための政策として、私は2点の政策を提言いたします。1点目の政策は少数民族特区の設立。2点目の政策は、少数民族文化の UNESCO 登録です。

まずに1点目の、少数民族特区の設立について。少数民族特区では、漢民族の流入を遮断します。そうすることによって、少数民族だけで自治を行い、生活する空間を作り上げることができます。そしてその中で、農耕や牧畜など、少数民族自身の日常生活としての文化の営みを実現するのです。この少数民族特区は、国連として働きかけます。この制度を導入する見返りとして、UNDP 国連開発計画から補助金を支給します。中国政府にとっても、この政策を導入する利益があるのです。

続いて2点目の政策である、少数民族文化の UNESCO 登録についてです。少数民族文化を保護することを目的とした、民族文化財の制定を働きかけます。この民俗文化財は、今ある世界遺産などとは異なり、国による申請なしで、UNESCO の側から登録することとします。これによって中国の少数民族文化に、世界遺産に準じるブランド力を与えてその文化的魅力を広く発信します。これによって、観光による収益の増加が見込め、それによる経済的自立の実現を図ります。実際に、中国ナシ族の村落は、世界遺産に登録された結果、観光客数は年間30万人から1200万人にまで急増しました。そして、経済的自立を達成すれば、少数民族が自らの生活を捨てて、その土地から流出することを阻止することができるのです。

## ⑥ 締め

マジョリティーはマイノリティーを許容し、それを守る。マイノリティーは自らで自らを保つ。それが両者のあるべき姿です。そのようにして中国は国を治め、少数民族は自治を行う。それこそが、中国と少数民族のあるべき関係なのです。そうあってこそ、両者の文化は失われることなく、共存することができます。互いに存在を認め合い、互いに誇りを持ち、そのような関係の中でこそ、漢民族の文化も、少数民族の文化も息づくことができる。私が強く惹かれた、あの輝きを放つことができるのです。

ご清聴、ありがとうございました。